有里湊がラブライブの世界に行くようです

陽炎@暇人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デスを封印する代償に命を失った有里湊。

だが目を覚ますとそこは知らない天井だった！

そして、普段ベルベットルームにいるはずのエリザベスから聞かされた湊が生きている理由、そして再び現れた影時間。湊の新たなる戦いが始まる・・・

注意、この作品では極度のキャラ崩壊、原作との変更点があります。

例（オリジナルのスキル、主人公の転生ペルソナが違うなど）

目　次

設定集～
みんなのステータスやプロフィール集ｖｏｌ．１ ―― 1
序章～帰ってきたペルソナ使い
目を覚ましたら知らない天井だった ―― 4
起きたら幼馴染に再会したんだが ―― 7
幼馴染の家に言ったらハプニング（意味深）が起きた ―― 10
鼻の長い老人から衝撃の事実を伝えられた ―― 13
久々に戦ったら敵が弱すぎたんだが ―― 17
幼馴染の親友が家に来た ―― 21
ファミレスでの出来事 ―― 24
家に帰ったらまさかのアイツがいたんだけど!? ―― 27
第一章　誕生の春とアイドルと
桜吹雪く時、春は始まる。（前編） ―― 30
桜吹雪く時、春は始まる。（後編） ―― 34
幼馴染の親友は鬼のように怖かった!? ―― 39
生き残る為に少年少女は銃を取る ―― 43
幼馴染と編入生　と作戦会議？ ―― 51

設定集～
みんなのステータスやプロフィール集ｖｏｌ．１

有里湊

かつて世界をニュクスから守るためデスを封印した代償に命を失った湊だったがエリザベスが力業で別の世界線に移動してきた、しかしその影響か移動してきた世界線での記憶はない。[5年前の事故に遭った湊の記憶]

月光館学園に居たときとは違い、穂乃果がいるため少しテンションが高い。この作品での湊は小さい時に弓道を習っていた設定です。

ペルソナ　オルフェウス

斬打貫火氷雷風光闇

弱　耐

～スキル～

アギ

アギダイン

突撃

火炎ハイブースタ

タルンダ

タルカジャ

湊が覚醒させた最初のペルソナであり、最後まで使用していた。

世界線移動の影響で本来付かないはずのスキルが着いていて、後に転生するペルソナも変わっている模様。

高坂穂乃果　アルカナ『太陽』

スクールアイドル『μ’ｓ』のリーダーであり、湊の幼馴染。５年前の交通事故以来、毎日湊に見舞いに来ていた。５年前の事故により心にトラウマを負っている。なお、穂乃果は湊の事が好きだが自分自身の気持ちに気付いていない。

ペルソナ　『タレイア』未覚醒

斬打貫火氷雷風光闇

耐耐弱　　耐弱
～スキル～（初期）
アギ
ハマ
ディア
タルカジャ
突撃
穂乃果のペルソナで
物理は貫通以外耐性持ちだが、貫通には弱く、また、闇属性などのムド系スキルに弱い。
外見…　豪華絢爛なドレスを纏い右手には仮面を、左手には地を照らす太陽の形を模した杖を持っていて、全てを照らす太陽の様な笑みを浮かべている。

園田海末　アルカナ『魔術師』　未登場
穂乃果の幼馴染で弓道部に所属しており、過去に一度湊を見かけているが本人は覚えていない。性格は原作とは違い、少しだけ穂乃果に対して怒る時の言い方が柔らかくなっている。

ペルソナ　『ポリュムニア』未覚醒
斬打貫火氷雷風光闇
　耐弱耐　吸
～スキル～（初期）
ブフ
シングルシュート
ラクカジャ
ジオ
海末のペルソナ、貫通と氷結に耐性があり、疾風は吸収するため便利ではあるが、代わりに火炎に弱点がついてしまっている。
外見…　巫女装束を見に纏い左手には弓を持ち、腰に脇差をさしており、真実を見極める目をしている。

南ことり　アルカナ『恋愛』未登場
穂乃果の幼馴染で裁縫が得意なのは原作と同じだが、
裁縫のレベルは原作よりも高い。
ちなみに湊とは面識は5話までの時点ではなく、湊が穂乃果の幼馴染であることも知らない模様。
ペルソナ　『エウテルペー』未覚醒
斬打貫火氷雷風光闇
弱　耐弱　耐
～スキル～（初期）
ガル
スクカジャ
スクンダ
ディア
ことりのペルソナ、火炎と疾風が耐性持ちではあるが打撃と氷結に弱いが相手の素早さを下げつつも味方の素早さを上げることが可能。
外見…　純白のローブを纏い、左手に笛を持ち、右手には魔道書の様な本を抱えていて、視たものを虜にする美しさがある。
今回はここまで。
次は一年生メンバーが加入した時である…

序章～帰ってきたペルソナ使い
目を覚ましたら知らない天井だった

プロローグ

「待てよ！待てって言ってんだろうが！」
「ちょっと待ちなさいよ――！なにする気よ！」
「行かないで！――さん！」
ごめんな、みんな。でもこれだけは言っておこう。
「・・・ありがとう、じゃあ僕はいくね。」
さぁて、大事な仲間を守る為にニュクスにはキツめの奴をおみまいしてくるか。
そして、この後、一人の少年の犠牲をもって影時間は終わりを告げた、はずだった・・・
その頃、ある場所でとある会話があった。
「少しよろしいでしょうか？」
「君は・・・エリザベスか。いいよ、何か用事かい？」
「ええ、実は・・・」

・・・まぶしい、そんなことを感じ、目を開けると知らない天井だった。辺りを見回すと身体に繋がれた機械やパイプのベッドがあるから病室なのは解るんだけど・・・
「あれ、此処は何処だ？病室の一室みたいだけど・・・確か僕はあの時ニュクスを封印した代わりに死んだ筈なんだけど」てか僕生きてたらニュクスがまた出てくるじゃないか・・・誰が僕をあそこから引っ張ってきたんだい？
「それはわたくしが力業で連れ戻したからでございます」
僕は驚いて女性の声がした方に振り向いた、そこには僕のよく知るエリザベスがいた。
「うわあ！エリザベス!?ちょっと待て、エリザベス力業で連れ戻したってどう言うことなの？」

彼女はエリザベス、かつてベルベットルームにいた住人で
何かと世話になった。まぁ彼女なら力業で僕を連れ戻せそうだけど・・・ でもほんとに僕を力ずくで連れ戻したとしたら封印が解けるし・・・
「ええ、それでしたらニュクスに『オハナシ』をしただけです。今貴方を封印している湊様を用事で借りますゆえ大人しくしてくださいと。」
うわぁ・・・ これって裏を返せば『好き勝手したらメギドラオンするから覚えとけよ』ってことじゃん・・・・・・ エリザベスは怒らせないようにしよう・・・

「所で何で僕を連れ戻したのさエリザベス、もうデスは僕が封印したから出てこないんじゃないの？」
まさかデスは他にもいるのか・・・ ？
「私が貴方様を連れ戻しましたのは、今いるこの別次元の世界で発生している影時間を消してもらうためでございます。」
「なに？別次元？」
「しかも影時間が出てきてる？・・・ だが別の世界線て影時間が発生したからといってわざわざ僕を連れ戻す必要はないはず・・・ つまりは僕がこの世界の影時間を消さなければいけない理由があるはず・・・・」
「なるほどね、でもただ別次元で影時間が発生したからといって連れ戻すってことはそうでもしなきゃいけない理由が有るんだろ？」
僕がそう言うとエリザベスは頷き、そして答えた。
「そうですね、今回貴方に影時間の消去を依頼したのはかつて貴方が両親と一緒に亡くしてしまった幼馴染がこの世界線では生きていて近いうちに影時間に巻き込まれるからです」
まさか。あの時に両親と一緒に亡くしてしまった人と言えば、小さい時に幼馴染だった高坂穂乃果しかいない。
あの日、僕と穂乃果は辰巳ポートアイランドから帰るために僕の両親と一緒の車に乗っていて、そしてあの事故で亡くしてしまった。

もしエリザベスの言う事が本当ならば穂乃果はこの世界線では生きていて近いうちに影時間に巻き込まれてしまうと。確かにそれはやらないといけないね。だって、かつて僕がいた世界線ではあの日に僕は助けられたのに両親たちと一緒に亡くなってしまったからね。

「了解、確かに僕を連れ戻す必要があるね、それはそうとここは何処だい？」

エリザベスと話してて忘れてたけど此処は何処だっけ？

「ここは西木野総合病院でございます。この世界線では貴方は昏睡状態にありました。そろそろ人が来ますので私はこれでお暇致します。」

「ん、情報ありがとうエリザベス、それじゃまたね」

さて、エリザベスと別れたわけだけど、この身体を見る限りだと高校二年生ぐらいの体型だろうからまた高校行くわけど、どうしようかな・・・ と考えていると元気な足音が近づいてきた。

起きたら幼馴染に再会したんだが

エリザベスが去ってから少し経ったころ、人が来る音がしたので大人しく待つことにした。
「とりあえずどうしようかな…」
そんなことをいいながらぼんやりしているとガラッ、と病室の戸が開いた。
そして現れたのは…
「え… 嘘、だよね… ?」
涙を流しながら信じられないと言った顔をした幼馴染の穂乃果だった。とりあえず泣き止ませないと…
「嘘じゃないよ、ちゃんと生きてるから、ずっと待たせてごめんね、穂乃果」
この世界線の僕はエリザベスと話しているときに聞いた話だと幼い時に交通事故で5年ほど眠ったきりだったらしいし、もともと僕がいた世界線では救えなかった。だからもう穂乃果を絶対に一人にはさせないし死なせない。

「ほんとに?ほんとにみーくんだよね?」
不安げに涙を浮かべながら穂乃果は聞いてきた。
「本当だよ、ちゃんと僕は無事だよ、それと… 見舞いに来てくれてありがとう、穂乃果」
僕は微笑みながら言った。
「うっ… うわああん!」
穂乃果は泣きながら勢いよく僕に抱きついてきた。
そうだよね、ずっと幼馴染が目を覚まさないんだ、
辛くても仕方ないよね。
久しぶりに会った穂乃果は随分と大人になっていて正直驚いた(何処とは言わないが)がとりあえず
「うおっと、泣くんじゃないよ穂乃果、君は笑顔が一番輝いてるから、それと、ただいま穂乃果。」

あの時救えなかった君に会うことが出来て僕は嬉しいよ… 今度エリザベスにお礼言わないとね。
「うん！おかえりみーくん！」
そう言って穂乃果は僕に向かって微笑んだ。
それから穂乃果としばらく最近の事を話していると…
ガラガラァ！
「「!!」」
どうやら看護師さんが来たらしい。
「あら、あなた目を覚ましたのね！」
「はい、先ほど目が覚めました」
ちなみに穂乃果は病室の外で待っててもらっている。
「早速質問だけど、貴方、記憶とか失ってない？」
記憶は前の世界線のなら有りますって言っても信じてくれないだろうしなぁ… あ、これなら特に違和感はないか。
「大体の事は覚えてますが一部欠落している部分がある感じです。」
「例えばいつの記憶が抜けてるの？」
「そうですね、僕が気を失う直前の記憶が曖昧な感じです。」
「なるほどね、それ以外は特に抜けてる記憶は無いのね？」
「はい、特にないです。」
「あ、忘れてたけど私はの名前は西木野由紀（にしきのゆき）。宜しくね、貴方のお名前は？」
… 唐突に自己紹介されたんだけど… まぁ僕もしないと相手に失礼だよね。
「僕の名前は有里湊（ありさとみなと）です。よろしくお願いします、西木野さん。」
そう言って握手した、多分この人この病院を経営してるよ、名字西木野だったし。
「私は戻るけど何かあったらナースコールで呼んでくださいね」
「わかりました。」
そうして由紀さんは仕事に戻っていった。
ふう… しかし、どうしようかな… 父さん母さんがこの世界線で生きているなら特に問題無いけど… もしいなかったら大分辛い

な…　っといけない、外で穂乃果を待たせてるんだった…
「穂乃果ー、入っていいぞー」
「うん、わかった」
　ガラガラガラァ
「みーくん、看護師さんと話してたけど、何話してたの？」
「特になんともないよ、単に身体に異常とかない？って聞かれただけだよ。」
　そういや穂乃果に聞くか、あのことについて。
「ねぇ穂乃果、一つ聞いていい？」
「？いーけど、何を聞くの？」
「僕の両親は生きてるの？」
「ッ！……　穂乃果が気が付いた時にはみーくんのお父さんお母さんはもう…」
　そんな…　この世界線でも父さん母さんには会えないのか…　どうしよう…　退院した後何処で暮らせばいいのかな…
「あ、でもみーくん、退院したら穂乃果の家で暮らすってお母さんが言ってたから！」
「地の文を読むじゃないよ、あとそれほんとなの？」
　まだ半信半疑なため湊は念のためもう一度聞くが…
「ホントだよ！確かにお母さん言ってたもん！」
　どうやら本当のようだ。
　それからその後事について穂乃果と話したあと穂乃果は帰宅し、僕は眠りに着いた…　余談だが、穂乃果が抱きついた時の事を思い出して眠れなかった…

幼馴染の家に言ったらハプニング（意味深）が起きた

４月３日　晴れ

場所～西木野総合病院前～

穂乃果が見舞いに来てから数日経過し、僕は今日退院して穂乃果の家族が迎えに来るのだが…

「全然来ない…」

かれこれ三十分待っているんだけど全く来る気配がない…　多分穂乃果のやつ親に言い忘れたな…

「はぁ…　しょうがない、ぼんやりしか覚えてないけど歩いて行きますか…」

実際そこまでここから穂乃果の家までは遠くなかったはずだから大丈夫だよね…？

まぁなんとかなると思いつつ僕は穂乃果の家に向かったのだった…

三十分後…

「ふぅ、着いた～、ここは昔と一緒なんだな…」

途中道に迷いながらも和菓子屋〝穂むら〟に僕は着いた。

確かもともとの世界線で最後に来たのは小３の時だったかな。そんなことを思いつつ僕は穂乃果の実家である店の扉を開けた。

「はーい、いらっしゃいま…　せ…」

扉を開けたらつまみ食いをしている穂乃果がいた。

うん、これは説教だね。よりによって迎えをすっぽかしてつまみ食いとは…

「ほーのーかぁ？そこで何しているのかな？」

「えっ!?みーくんなんでここにいるの!?あと穂乃果がつまみ食いしてたのは言わないでぇ！」

「断る。僕を暑いなか三十分も待たせておいて何を言わないでだって？」

「しょうがないじゃん忘れちゃったんだもん！」

「開き直るんじゃない!!」

それからずっと穂乃果と言い合っていたら穂乃果のお母さんが降りてきた、
「穂乃果！さっきからうるさいわ・・・ よ」
穂乃花のお母さんは口を開けたままフリーズしている。
なんかデジャヴ・・・ そりゃ驚くよね、ずーっと寝てた僕がここにいるんだもの。とりあえず挨拶しておきますか。
「こんにちは春穂さん。お久しぶりです、お元気ですか？」
「・・・ え、あっ、うん、元気だけど湊くんの方こそ大丈夫なの？５年も寝たきりだったけど・・・」
「大丈夫ですよ、特に問題ないので安心してください。」
まぁリハビリが地獄だったけどね・・・ どっかのスパルタ式な人にしごかれたし・・・
「ならいいのだけど・・・ あ、そういえば穂乃果から聞いたかしら、今日から私たちと一緒に暮らす事になるって」
「ええそれなら目が覚めた日に聞きました」
さて、お仕置きの時間だよ穂乃果・・・ このままお咎めなしとはいかないよ？
「それならよかった、穂乃果の今月のおこず「でもさっきつまみ食いしてましたよ」・・・ それはホントかしら？」
「ちょっとみーくん！それは言わないでって言ったじゃん！」
「知らないね！」
「無慈悲！」
穂乃果がなんか言っているがそれは置いておく。
「はいさっき店に入った時に見ました」
「そう。穂乃果？なにか言うことは？」
「ごめんなさぁぁい！」
その後、穂乃果の今月の小遣いが減ったとさ・・・
そんなこともあり、いよいよ穂乃果の家に上がるのだが・・・
穂乃果からは「階段上がって左に曲がればみーくんの部屋だよ！」といって自分の部屋に戻っていったので何番目が僕の部屋か分からないよ・・・（ ；；・ω・、）

「まぁいいや、とりあえず手前から開けてみよう…」
ガチャっとな、
「えっ…」
扉を開けたら穂乃果の妹が着替え中でした… ヤバイ、これはイゴったわ…
「な、なに見てるんですか変態いいぃ!!」
「すみませんでしたぁぁ!」
ズバァン! ガチャン!
穂乃果の妹に本気ビンタされてしまった、無茶苦茶痛い…
今のは見なかった事にしよう… うっかりボロを出したくないしね。特に穂乃果の前では。次からはちゃんとノックしよう。
コンコン
「穂乃果、いるかー?」
「いるよー」
「僕の部屋って穂乃果の隣だよね?」
「そうだよー!」
「ん、ありがと」
お礼をしつつ、僕は自分の部屋に入り、ベッドに突っ伏したのであった… あれ?そういえば穂乃果って妹の隣の部屋だったような… ?まぁいいや。

鼻の長い老人から衝撃の事実を伝えられた

「さっきは散々だったなぁ…」

そんなことを思いながらベッドから起き上がる。

時計を見ると寝る前は昼過ぎだったのがもう17時になっていた。

そういえば、この世界線に来てからずっと気になっていたのが自分のペルソナの状態だ。

自分の中にいるのは分かるんだけどね、なんというか… ぼんやりとした感じだ。多分ペルソナをこの世界線に来てからまだ一度も召喚してないのもあるかもしれないね。ペルソナを使うならエリザベスに召喚器を用意してもらうか、僕が別の世界線から来たことを知ってるのは彼女ぐらいだし。

とりあえず近くにある神田明神で健康祈願してこよう、あそこは不思議な雰囲気だし、もしかしたらベルベットルームもあるかもしれないからね。

さて、着替えとかしてお参りに行こうとしたら穂乃果と目があった。

「みーくん何処か出掛けるの？」

「うん、神田明神にお参りにね、健康祈願するために。」

「なるほどー！じゃあ穂乃果も一緒に行っていい？それにみーくんお金ちゃんとある？」

「ぐっ… ないです…」

そういえばこっち来てからお金なかったんだった… 今度からバイトしないとな…

「やっぱり無いじゃん！それなら穂乃果と一緒に行くよ！早く行くよ！」

穂乃果さんや、そんなに焦らんでもいいでしょうに… それに貴方まだ着替えてないじゃん…

五分後、穂乃果が着替えてきたので玄関に行き靴を履いていると穂乃果の元気な声が聞こえてきた…

「みーくんまーだー？」

「わかったわかった、今行くよ」
でも、たまにはこういうのんびりしたのもアリだと思いつつ、僕と穂乃果は穂むらを後にした。
途中穂乃果と話して知ったことだが、穂乃果の親友の母親が学校の理事長をしているらしく、僕のことで明日家に訪ねてくると言っていた。

関話関題（それからしばらく）

二十分後
「ふーついたー！」
「そうだね」
二人で男坂の長い階段を上りきり、神田明神に着いたのだが、
なんだろう・・・ 変な感じがする、具体的には神社が何かに汚染されてるような感じがする。気のせいだといいんだけどなぁ・・・ あと、隣の穂乃果の服が暑いから軽装なのは分かるんだけど・・・ 色々と意識してしまう。ゆかりより大きいな・・・ いけない、これ以上はゆかりに怒られる・・・ お賽銭しとこ。
「それじゃあさっそく賽銭しようか。」
「そうだね、はい五円玉」
「ありがとね穂乃果」
二礼二拍でお祈りを・・・ 僕が今年一年健康でありますように・・・
よしあとは一礼を・・「みーくんが健康でありますように・・・」
穂乃果・・・ 気持ちは嬉しいけど願い事は口に出さない方が叶うらしいよ？
「・・・ よしっ！それじゃあ帰るよみーくん！」
「あっごめん穂乃果僕ちょっと見るものあるから先帰ってて」
「えーしょうがないなー、穂乃果は先に家帰ってるね！早く帰って来てね！」
「大丈夫だ、問題ない。」
「うん、なら大丈夫だね！」
そういって穂乃果は帰っていった。

ふぅ・・・ 穂乃果には悪いけど帰ってくれないと困るからね。
「そこにいるんでしょ、エリザベス」
そして僕は神社の柱から僕の姿を覗きこんでいる人影に言った。
「おや、気付いていたのですか。」
エリザベスは驚いた顔をしながら出てきた。
「まぁね、そんなことより、ベルベットルームは入れるの？」
「はい、ご利用できますが、入りますか？」
「うん、入るよ」
エリザベスと短い会話を交わし、僕はベルベットルームに入った。

場所　ベルベットルーム
「ほう、これは懐かしいお客人が訪れましたな」
僕に話かけてきた老人の名前はイゴール。このベルベットルームの主であり、僕の持っているペルソナを合体して新しいペルソナを産み出してくれる人でもある。会うたびに思うのだけれど、一体イゴールは何歳なんだろうね？軽く１００歳は越えていそうだけれど。っと、そんなことよりイゴールに聞きたい事があるんだった。
「久しぶりだねイゴール、さっそくだけど質問していいかい？」
「構いません、してご用件は？」
「今僕のペルソナはどうなっているんだ？」
「そうですね、貴方様の今ペルソナの大半は使えないですが『オルフェウス』と『タナトス』は無事なご様子・・・ これも何かの縁でございますな。」
オルフェウスは分かるけどなんでタナトスも使えるのはなんでだろ？まぁいいか。
「他のペルソナはどうなった？」
「それは私がお伝えします。今現在あなたが使っていたペルソナのほとんどは鎖のようなもので封印されております。おそらく、別世界線に移動した影響でしょう。」
なるほどな、だが、鎖のようなものであって解放できないわけでは無さそうだ。それなら安心だ。あ、あとあれをお願いしないと

「あとエリザベス、召喚器って用意できる？いつも僕たちが使ってた銃のやつなんだけど、」
「それならここに。どうぞ、あと元々の世界線であなたが使っていた剣も返します。」
何故エリザベスが召喚器と剣を持ってるのは置いといて、
これで準備万端だ。
「ありがとねエリザベス、これで心置きなく戦える」
エリザベスは話しながら湊に召喚器と片手剣を渡した。
さて、用も済んだし帰るか・・・
「おや、もう帰られるのですか？」
「うん、そのつもりだけど？なにか言うことがあったの？イゴール」
「左様、今回発生した影時間の原因がある場所はお客人の幼馴染である方が通っている学校でございます。それともうひとつ、どうやらお客人は元の世界線に戻ることができないようです。」
「なんだって!?それだと元の世界線でもデスが復活してしちゃうじゃないか!?」
「ですがお客人がいた世界線では別のお客人がデスを封印なさった事になっています。つまり、存在そのものが貴方が元々いた世界から消えた事になります。」
なに、ということはもし元の世界線に戻れても誰も僕を覚えてないと。まぁいいか、今はあまり考えないでおこう。
「そうなのか、あと話すことはないかい？ないなら僕は帰るね。」
「特にはございません、それではまた会うときまで、ごきげんよう・・・」
その言葉を聞いたのを最後に僕はベルベットルームを去ったのだった・・・

久々に戦ったら敵が弱すぎたんだが

４月３日　夜　神田明神　境内にて～

「ふぅ、かなり時間がかかってしまった、早く戻らないとな・・・　ん？」
空を見てみると少し黄緑がかっている、影時間かと思ったが、影時間特有の空気の重さが無いため影時間ではない。だが、不安になった僕は急いで家に向かった。
穂乃果になにかあったら大変だからね。
「はぁっ、はあっ、急がないと！」

十分後・・・
夜　～和菓子屋穂むら～
ふぅ着いた、帰る途中で信号とか見たけど特には異常はなかった。
ただ、確実に今日は影時間が発生すると僕は
思っている。あ、穂乃果たちにただいま言わないと・・・
「ただいまー」
「おかえりみーくん！」
あぁ・・・　穂乃果の笑顔は見てるだけで元気がでるね。」
「えっ／／／」
・・・　なんか穂乃果の顔が赤いんだが、熱でもあるのか？
心配だし確認しよう。
「ちょっと失礼するね。」
「み、みーくん？／／／」
ピトっ
「っ！／／／」
んー熱は無いけど顔が何でこんなに赤いんだろう？
「み、みーくん／／／近いよ・・・　／／／」
「あ、ごめんね今離れる」
取り敢えず熱はないからいっか。
っとそんなことより穂乃果に聞かないといけないんだった。

「なぁ穂乃果、そう言えば僕ってどこの学校に行くことになってるの？」
「えっ、あ、うんとね確か穂乃果たちと一緒の学校に行くってことりちゃんのお母さんが言ってたよ！」
なるほどね、穂乃果が一緒なら大丈夫だね。多分だけど。
あ、もしかして・・・
「ねぇ、それって明日家に来る人なのか？」
「うん！そうだよ！」
やっぱりか、なら問題ないね。
「ん、ありがとうね穂乃果、あとその学校って何て名前なの？」
「穂乃果たちが通ってるのは音乃木坂学院（おとのきざかがくいん）だよ！」
「音乃木坂ね、教えてくれてありがとね穂乃果。」
「どういたしまして！」
穂乃果は嬉しそうに微笑んでいる。
この笑顔は僕が絶対守り抜くと僕は決心した。
深夜　～高坂家　湊の部屋～
夕食後、穂乃果の妹の雪穂と昼間の事で和解して穂乃果と世間話をした後、僕はエリザベスから貰った召喚器をホルスターに入れて片手剣を背負い、影時間に備えていた。
そして、それは唐突に始まった。
部屋の電気が消え、部屋を照らすのは不気味な輝きを放つ月の光のみとなった。
「まさか本当に影時間が発生しているなんてね・・・」
そして僕は穂乃果たちが象徴化しているかいないかを確認するために静かに行動した、結果、ほとんどは象徴化していたが、やはり穂乃果だけは象徴化していなかった。爆睡してたから起きる気配は無いが、やっぱり少し心配だなぁ・・・
「さて、今回の影時間が発生している起点を探すとするかな。」
僕は穂乃果を起こさないようにそっと家を出て、穂乃果からの情報を頼りに音乃木坂に向かった・・・

影時間　～音乃木坂学院前～

家の外に出て見たらやはり信号、車などの機械はすべて止まっていた。

そして何より・・・

「影時間だからまさかとは思ったけど、やっぱりタルタロスになってたとはね・・・」

そう、かつて僕が仲間達と攻略し、ニュクス・アバターと戦った場所であり、仲間に別れを告げた場所だ。

僕はタルタロスと化した音乃木坂に行こうとしたが、いつの間にか出現していたシャドウ、『臆病のマーヤ』が道を阻んでいた。

「そうは問屋がおろさないよね、まぁリハビリ代わりにやりますかね。」

僕は右腰に掛けているホルスターから召喚器を抜き、頭に召喚器を突きつけた。

そして、僕はこの世界に来てから眠っていた内なる仮面を呼び覚ました。

「ペ　ル　ソ　ナ!!」

パリィィン!!

――我は汝・・・・・・　汝は我・・・・・・

我は心の海より出でし者・・・・・・　幽玄の奏者「オルフェウス」なり！

ふぅ、久々だったから少し不安だったけど大丈夫そうだし、それじゃ、やりますかね！

「小手調べだ！焼き尽くせ！オルフェウス!!」

『アギッ!!』

オルフェウスの放った炎はシャドウの回りを燃やし、シャドウは逃げ道を無くし、動けなくなる。しかし、その隙を湊は逃さなかった。

「叩け！オルフェウス!!」

『オオオオッ!!』

オルフェウスは美琴を鈍器にしてシャドウに一発、二発と叩きこみ、シャドウの動きが鈍くなった所で湊は最後に全力で叩きに行っ

た。
「止めだオルフェウス!!」
『アギダイン!!』
オルフェウスが放った爆炎はシャドウを地面ごと焼き尽くし、シャドウを文字通り消し炭にしたのであった。

シャドウを倒し、ペルソナをしまった湊はあることに気付いた。
「なんで道に傷一つついてないんだ?」
確か元の世界線の時は影時間で破壊したものは現実でも壊れているはずなのになぜかさっき地面を陥没させたはずのところがいつの間にか元通りになっていた。まさか世界線が違う影響かなのか?
あと敵が弱すぎな気がする・・・ あ、そろそろ影時間か終わりそうだ・・・ 仕方ない。
「まぁいいか、とりあえず帰りながらシャドウを倒しますか・・・」
その後、湊が家に帰るまでに通った所にいたシャドウは全部焼き尽くされたとのこと。
真夜中 ～高坂家 湊の部屋～

「ふぅ、今日は大変だったなぁ・・・」
そんなことを思いつつ僕は眠りに着いた。

幼馴染の親友が家に来た

日差しが眩しい。てことは今は朝か。
「あぁよく寝たぁ…」
ベッドの近くにあった目覚まし時計を見ると時刻は午前7時を示していた。
なにやら物音が聞こえたので耳を澄まして聞くと下で誰かの騒ぐ声が聞こえてきた。二度寝しようかとも考えたけど今日は学校の人が来るとかなんとか言ってた気がするしなぁ…
「しょーがない、起きますかね…」
面倒くさいと思いながら僕は一階のリビングに向かった。
「おはよーみーくん!!」
穂乃果が元気よく挨拶している… って待て、いつも寝坊しそうになるあの穂乃果が早起きだと… !?さりげなく聞いてみよう…
「うん、おはよう、今日は早起きなんだね。」
「えへへー!今日はことりちゃんとそのお母さんに会うから早く起きたんだー!」
そういや今日は穂乃果の親友が来るっていってたね…
「ごめんくださーい!」
っと、噂をすればだね。どんな人だろうとか考えていると扉を開けてとても綺麗な女性と少女が入ってきた。取り敢えず女性の方に挨拶は先にしておこう…
「こんにちは。ええと、お名前は…」
「私の名前は南雛陽(みなみひなよ)、あなたが有里君よね?。」
まだ名前言ってないんだけどなぁ…
「そうですが… もしかして貴方がこの前穂乃果が言っていた学校の… ?」
「ええそうよ、私は貴方が今度から通う学校の理事長を勤めているの。今日は貴方に制服を届けに来たのと個人的に話したい事があるからよ。」
まじか、僕の為に制服を届けに… 優しい人なんだね、個人的な話

には少し疑問を抱きながら僕はそう思った。
「なるほど、そういう事でしたか、それは有りがたいです。ところで、後ろにいる方は娘さんでしょうか？」
「ええ、そうよ。」
「南ことりです、よろしくね湊君♪」ニコッ
か、可愛いッ！擬音が聞こえてきたよ!?
と、とりあえず気付かれないようにしないと・・・ さっきから後ろにいる穂乃果の視線が怖いんだよ！
「うん、よろしくねことりさん。」
そんなわけでことりさんとの挨拶を終えた訳なんだけど・・・
「ところで有里君？」
「何でしょうか？」
雛陽さんは少し困った顔をしている様だ・・・
「実は少し言わなくてはいけない事があってね、これから湊君が通ってもらう学校はね、女子高なのよ。」
へーそーなんだ・・・ はい？
「えええぇ!?ちょっと待ってください雛陽さん!?何で女子高に男子生徒である僕を編入させるんですか！」
「ごめんね有里君、実は私が理事長をしている音乃木坂学院は近年生徒数が減少していて、来年度に共学化することにしたの。だから来年度から共学化するために貴方にテスト生になってもらう事にしたの、説明してなくてごめんね」
生徒数の減少ね、昨日見た感じだと相当デカかった様な気がするんだけどね・・・ まぁテスト生になるのはいいとして・・・
「まぁそんな理由だとは思いました、雛陽さん、こちらからも質問しますが、僕以外のテスト生はいますか？」
穂乃果もいるから大丈夫だとは思うけど・・・ 出来ればやっぱり男友達が欲しいなぁ・・・
「有里君以外にも二人いるわよ、名前は確か・・・ 真田明彦君と伊織順平君だったかしらね。」
「なッ!?」

雛陽さんから聞かされた名前は、かつての仲間たちの名前だった。これも何かの運命なのだろうか？

「あら、有里君はこの二人を知っているのかしら？」

「えと、どこかで聞いた気様ながします」

こういう風に答えないと自分の秘密（世界線移動してきた）がバレるからね…（；；・ω・、）

そんなこんなで雛陽さんから学校で過ごす際の注意点などの説明を受けた後、穂乃果達と近くのファミレスに昼食を食べに行くことになった。

だがそこで一波乱起きることを湊は知るよしも無かった…

ファミレスでの出来事

僕は雛陽さんから高校に行く際の注意点を教えてもらい、制服を頂いた後、昼頃に穂乃果達と近くファミレスで昼食を取ることにした。そして穂乃果の父親が運転している車に揺られること１０分ほどで目的のファミレスに着いた。正直寝てたいものではあるが、そうは問屋が卸すはずもなく・・・

「みーくん着いたよー！」

僕がウトウトしていると穂乃果が起こしてきた。仕方ないので起きることにした。あぁめんどくせぇ・・・

「ん、了解、今起きるね」

そうして僕は穂乃果達と店に入るのだった・・・

さて、今僕は穂乃果達と何を注文しようか考えているのだけど・・・なんだろう、誰かに見られてるような？まぁいいや、とにかく決めようと思っていると穂乃果が話しかけてきた。

「みーくんは何を頼むの？」

「僕？僕はハンバーグドリアにしようかな。」

なにかと美味しいからねぇ、ドリアは。

「そっかー！じゃあ穂乃果はオムライスにしよーっと！」

穂乃果はそう言いながら呼び出しボタンを押すとすぐに店員さんが来た。

「ご注文は御決まりでしょうか？」

「僕はハンバーグドリアを一つとドリンクバーで」

「私はオムライスとドリンクバーでお願いします！」

「かしこまりました。」

店員さんは若干疲れた顔をしながら厨房へ消えていった・・・ バイト少ないのかな？

ちなみに、雪穂とことりさんは穂乃果と同じものを頼んでいた。あと、僕達の座っている席はこんな感じだ。

僕　穂　　春穂さん

机机机　　机机机

南　雪　　雛陽さん

説明が雑なのは流してくれると有りがたいね・・・（　；　・ω・、）

さて、そんなことよりドリンクバーに行かないとね！

っとその前に穂乃果に言っとかないとね。

「先にドリンク取りに行ってくるね～」

「わかったー！」

穂乃果に飲み物を取ってくると告げた僕はドリンクバーに向かった。

僕はふと隣が気になったから左に顔を向けた、なんとそこにはいるはずのない人物がいた。

僕の視線の先にいた人物は、もう逢うことがないと思っていたかつての仲間である伊織順平の姿だった。僕が動揺していると、順平が心配そうに話しかけてきた。

「ちょいちょい！君！なんで泣いてるの!?」

「え・・・」

なんで泣いているんだろう・・・ 僕。

涙を止めようするほど涙が溢れてくる。

そうか、僕は今嬉しいと感じてるのか、だからこんなにも涙が溢れるのか・・・

順平は僕が泣き止むまでそばにいてくれた。

泣き止むまで一分後・・・

「もう大丈夫か？」

「はい・・・ 大丈夫です、ただ・・・ 昔の友達とあまりにも似ていて・・・」

似てるも何も本人だなんて口が裂けても言えないけどね、なんて思っていると順平はこう言った。

「なるほどね、そんなに俺っちと似ているなんて、ソイツは幸せ者だねぇ！」

ははっ、口調までＴＴＴ（順平）と一緒じゃん・・・ さてと、そろそろ戻らないと穂乃果が心配しちゃうね。

「そうかもね、さてと、周りのお客さんに迷惑かけてる様だし僕はちゃっちゃっと飲み物取ってくるね。」

「おう！いってら！あと君、名前なんだい？」
「僕は有里湊！貴方は？」
「俺っちの名前は伊織順平だ！また今度できたら話そうぜ湊！」
「ッ!!うん！また今度！順平！」
順平と別れた僕はウーロン茶を取り、穂乃果がいる席に戻るのだった・・・

家に帰ったらまさかのアイツがいたんだけど!?

ファミレスでの食事を終えた僕達は家に帰る為に、また穂乃果のお父さんに車を運転してもらい時々遠い目をしながら家に帰って来た。
リビングでぼんやりしながらテレビを見ていると穂乃果が聞いてきた。
「そういえばみーくん?」
「なんだい?」
「みーくんは接客とか出来る?」
接客・・・ ね、これは随分と唐突だね。
正直穂乃果の妹である雪穂に任せれば良いのでは、と思わないでもないが、言ったら面倒ごとに成りそうなので黙って答えた方が良さそうだ。
「まぁ出来ない訳ではないけど・・・」
「本当っ!?」
満更でもなかったようだ。だかその瞬間、
「やった~!」ガバッ
「ちょっ穂乃果近いよ」
近い、近すぎる、あとふわっといい匂いもしてるから離れて欲しい。
「ごご、ごめんみーくん!」
穂乃果はやっとこの状況に気付いたのか、顔を赤くしながら慌てて僕から離れた。どうしてこんな積極的なのに反応がウブなんだろうか?あれか、無意識なのか。
「まぁそれは置いといて、接客が出来るか聞いたってことはバイトさんが足らない感じなの?」
僕が聞くと穂乃果は苦笑いしながら答えた。
「うん・・・ 最近お客さんが沢山来るようになったからスムーズに商売しずらくなったってお母さんがいってたよ」
なるほどね、確かにこれは僕の手が必要になるよね・・・ そう言えば最近お金に困ってるし、これで店の手伝いしたらバイト代も貰えるかもしれないな・・・ よし。

「分かった！それじゃ穂乃果は春穂さんに僕が店番手伝うって言っておいてー!!」
「えっいいの!?」
「勿論ッ!!」
全てはお金の為に!!
と、こんなこともあり僕は明日から穂むらのバイトをする事に成りました。これで資金については一安心かな、
・・・ 多分だけどね。
とまぁ、夜になり僕は明日の入学式の準備をしていると、ふと懐かしい声が僕の耳に聞こえてきた。
「やぁ、久しぶりだね。」
「確かに久しぶりだけどまずノックとかしようね、ファルロス」
ファルロス・・・ こいつは見た目は小さな男の子だけど簡単に言えばかつての世界線で僕の中にいたデスの分身みたいなやつだ。
・・・ でもなんでこっちに来てから（世界線移動してから）は一度も姿を出さずにいたのになぜ今出て来たんだろう？
「ごめんごめん、っとそうだった。今キミに会いに来たのは今回の影時間の事についてなんだ。言いたい事は沢山あると思うけど。」
「影時間の事ならイゴールから聞いたんだけどなぁ・・・」
まぁ二度も同じことは言わないだろうけどさぁ。
多分イゴールの説明を更に掘り下げるんだろうけど。
つか、君エリザベスになんか言われてなかったっけ？
「確かに、キミはあのご老人から話を聞いたと思うけど、それだけが全てではないんだ。」
「なっ・・・」
まさかの推測どうりだったよ・・・ 面倒ごとじゃなければあいのだけど。
「まぁ驚くのも無理はないよ、それほど今回の件は異質さを増してるからね。」
「うん、本来影時間にタルタロスに変貌するはずの学校が月光館ではなく今回は音乃木坂だからね。」

そう、この世界線で生きている穂乃果を守る為に僕はこの世界線に来たんだから、この瞬間までは思っていた。
「そしてここからが重要だ、キミは穂乃果ちゃんだけを守ろうとしているけど、今回は穂乃果ちゃんだけを守ろうとしても解決しない、何故なら今回の影時間を消すには女神の力が必要不可欠だからさ。」
「女神の・・・ 力？」
女神の力とは一体なんだろうか？アルテミスとかエレシュギガルとかの事なのかな？
「そう、女神の力、その力があればこの世界の影時間は消失させる事ができる。正確には女神の加護を受けたキミによってね。ただ、一つだけ難点がある。それは音乃木坂に通っている人から女神の力を持つ人達を探さなくてはいけないこと、それにその女神達との絆も深めなくてはいけないんだ。」
えぇ・・・ 人探ししなきゃいけないのか・・・ ぶっちゃけ穂乃果以外の事はどうでもいいんだけどなぁ・・・
「・・・ 今どうでもいいと思ったよね？」
「ソンナワケナイヨ」
何故バレたし・・・ まさかファルロスはイノベイターだったりするのだろうか。
「まぁそんなことより、そろそろ影時間が始まるけど、どうする？今日はもう寝るかい？」
「うん、明日は早いし、今日は寝ることにするよ。」
確か明日は朝7時までに正門の前に来てと雛陽さんから伝えられていたかな。
「そうか、じゃあまた今度ね。二度目の高校生活、存分に楽しんでね。」
「わかってるよ、ファルロス」
その言葉を口にしたのを最後に、僕の意識は夢の中に落ちていった・・・

第一章　誕生の春とアイドルと桜吹雪く時、春は始まる。（前編）

　僕はファルロスと話をした後、布団に入り、眠りについたのだが、瞼を完全に閉じると同時にどこかの学校の体育館の中にいた。

　どうやら腰には召喚器がホルスターに収まっているからひとまずは安心だけれど・・・

「・・・　出口を探そう。」

　少し焦りながら出口を探そうとした矢先。

「出口？そんなものはココにはねェ、何故ならてめぇはココで死ぬんだからナァ!!」

　突然、見知らぬ男の声が響いてきた、それと同時に殺気を感じた僕はバックステップでその場から下がった。その直後に耳をつんざくような爆音が聞こえ、先程までいた場所は大きなクレーターになっていた、なにそれこわい。

　僕が爆発の威力に驚いていると男の声が聞こえてきた。

「チッ、伊達に世界を救った英雄じゃねぇって訳かよ。」

　男の顔は見えないが、確かにこちらに近づいてきている。そして、今度は斬撃波が三方向から飛んでくる。

「生憎と僕はまた死ぬわけには行かないからね。」

　僕はその攻撃を見切り、斜めに飛び出して回避した。

「へぇ、コイツも避けるとはやるじゃねぇか。

　だがこいつは避けれるかナァ!!」

　男が呟いた直後、男の上空に巨大な火の玉が現れた。

「げっ、あれはくらったらヤバイかもね・・・」

　どうする、どうする僕。この状況を打開する手段は・・・　あった！何故か知らないけど僕の腰には召喚器がある、なら耐えれる！

「来いッ！ペルソナ!!」

　パァリィン!!

僕はオルフェウスを召喚し、巨大な火の玉から身を守った。まぁ衝撃はフィードバックするからかなり痛い。
「ッチ!!これも耐えるのかよ!?ならもう一発・・・ チッ、ヤツがそろそろ来るか・・・ 命拾いしたな、次会った時は必ずテメェを仕留めてやるから覚えておけ!」
男は僕に向かってそう言った。
直後、視界が暗転し、僕は跳ね起きた。
「ッ!!、さっきのは、夢・・・ なのかな?」
辺りを見渡すと最近ようやく慣れてきた自分の部屋だった。先程の謎の夢のようなものを見てしまい目が覚めてしまった。あの男は一体誰だったのだろうか?それよりも時刻は4時、二度寝しようにも微妙な時間なので最近だらけていたし少しトレーニングでもしておこう。
「ここら辺で気兼ねなくトレーニング出来るところ言えば・・・ 神田明神だね。よし、準備して行ってこよう。」
あ、机に置き手紙書いとこ。穂乃果とか騒ぎそうじゃん?
スポーツウェアに着替え、僕は走って神田明神に向かった。
5分ほど走ると、一昨日来た男坂が見えてきた。
ところで思うんだけれど、なんでこんなに階段が急なんだろうか?なんて事を考えていると神社の境内に着いた。巫女服を来た女性が掃除をしているみたいだけど、まぁいいか。お賽銭は終わってからにしよう。
「さてと、始めようか。」
僕が今からするトレーニングはこうだ。
・神社の周囲をランニング（全力）一週
←
・男坂を全力階段ダッシュ三本
←
・ストレッチ
とまぁだいたいこんな感じだね。
てな訳で僕は全力ランニングをすることにした。

腰を低くし、両手を地面に付ける、そして瞳を閉じて頭の中でカウントダウンを始める、3，2，1・・・ 今ッ!!
「うおぉぉ!!」
限界を突破するんだよぉォォォ!!な勢いで僕は駆け出したのであった。
それから一時間後、全力で一週した勢いで階段ダッシュ三往復三本をやったのはいいんだけど・・・
ぜぇ、ぜぇ・・・「ちょっと無理しすぎたな・・・」
全力でやりすぎてオーバーヒートしてしまった・・・
僕が無茶し過ぎて休憩していると先程まで掃除していた大人っぽい巫女さんが近づいてきた。
「ずいぶんと熱心やなぁ～ここら辺では見ない顔やけどもしかして最近引っ越して来たん？」
巫女さんが質問してきたの答えることにした。
「はい、先日引っ越して来たんですよ。」
引っ越してきたと言うよりかは居候してる感じだけどね・・・
「へぇ～そうなん！あ、ウチは東條希（とうじょうのぞみ）、ここの近くにある高校に通ってるんよ～」
「奇遇ですね、実は僕も今年から近くにある高校に通うことになったんですよ、共学化テスト生ですが。」
そう答えた瞬間、一瞬だが東條さんの目が変わった気がした。
「キミがもしかして理事長が言ってたテスト生？」
「そうですよ、言い忘れていましたが、僕の名前は有里湊です。」
すっかり忘れていたので自己紹介をした。
「湊君か～いい名前やね！」
「ありがとうございます。」
東條さんに名前を褒めてもらったのは良いのだけれど、
何故か東條さんは悪い笑みを浮かべている・・・
「ん～決めた！今度からキミをみなとっちと呼ぶね！ウチは生徒会に入ってるから何か困ったことがあったら気軽に聞いてや～」
「そうですか、今後とも便りにしてます、東條先輩。」

僕がそう答えると、東條先輩は嬉しそうにしていた。あ、やばい、そろそろ戻らないと学校遅れちゃうな・・・

「すいませんそろそろ帰って着替えないと遅れるので帰ります。」

「そーなん？それじゃ、続きは学校でな～」

東條先輩と話した後、お賽銭をして急いで家に帰った僕であった。

ちなみに東條先輩は僕が見えなくなるまで手を振ってくれた。

桜吹雪く時、春は始まる。（後編）

神田明神でのトレーニングを終えた僕は家に帰った後に穂乃果達と朝御飯を食べているんだけど・・・

「ねぇみーくんあの置き手紙はどういうことなのさ!?」

あぁ・・・ アレを見たのか。

「え、僕は単にちょっとトレーニングしてくるって書いただけだよ?」

「じゃあなんで「少し修行してくる」って書いたのさ!」

穂乃果は何故か不機嫌そうに頬を膨らましている、かわいいと思いつつ、穂乃果に返答した。

「なんと言うか・・・ ノリ?」

「ノリで間際らしいの書かないでよ!?私すっごい心配したんだよ!?」

ありゃ、逆効果だったみたい、どうしようかな・・・ とりあえず穂乃果の機嫌をとらないと・・・

「ごめんごめん、本当は今の僕じゃ穂乃果を守れないからさ、穂乃果を守れるように鍛えていたんだ、ちゃんと言ってなくてごめんね」

そう言って僕は穂乃果に頭を下げたんだけど一向に返事が帰って来る様子がないので顔をあげてみると・・・

「ッ!?・・・ それはズルいよみーくん／／／」プシュー

何故か顔を真っ赤にして俯いていた。何か変なこと言ったかな?

「そんなことよりも僕は先に学校の用意して先に行ってくるね。」

穂乃果と話していたら時計は6時を回っていたので穂乃果には悪いけど着替えて先に行く事にした。

「さてと、早くしないと遅れるからそろそろ出よう。」

リビングにいた春穂さんに行ってきますと言って僕は音乃木坂に向かった・・・

少し慌てながら家を出たせいか、以前雛陽さんが生徒会の人が迎えに来ると言っていた時刻よりも早く学校に着いてしまったようなので、生徒会の人が来るまで待っておこうかな、下手に動いたら相手も困るかもしれないと思っていたら生徒会の人らしき人物が近づいて話しかけられた。

「その制服・・・ 貴方が例の転入生かしら？」
「はい、そうです、有里湊と言います。」
「そう、有里君ね、私は絢瀬絵里（あやせえり）、この音乃木坂で生徒会長を務めているわ、よろしくね。」
どうやら絢瀬さんが雛陽さんが言っていた人で間違いないようだ。
絢瀬さんと握手を交わした後、絢瀬さんと学校に入り理事長室に向かい、少しして理事長室前に着いた。
コンコン
「失礼します、絢瀬です。」
「いいわ、入りなさい。」
絢瀬さんの後に続き理事長に入る、そしてそこにいたのは・・・
「この間ぶりね、湊君。」
南理事長だった。
「はい、お久しぶりです、理事長」
僕と雛陽さんと話していると絢瀬さんは何やら不思議そうな顔をしていた、なんでだろうか？
「どうしましたか絢瀬さん？」
「え？あ、その・・・ 貴方ってずいぶんと理事長と仲が良いのね？」
「そんな大した事じゃないですよ、ただ、僕の幼馴染の親友の母親が理事長だったってだけですよ？」
何をそんなに驚く必要があるんだろう・・・
そんなことを考えていると絢瀬さんは先程の僕の発言の意味に気付いたようで・・・
「へぇ・・・ そう言うことね、納得したわ、あとそんなことよりそろそろ生徒達は集会だから行きましょう、あと貴方はスピーチをするから内容考えておいて。」
「え、ちょ」
絢瀬さんは僕が反論する前に理事長室を出ていった・・・
とにかくもうやるしかないなら仕方ない・・・
そうして僕は移動しながらじきに来るスピーチの内容を考えるのだった・・・

あれから少し経ち、遂に集会が始まった、一応スピーチの内容は大丈夫だけど、緊張で凄い足がプルプルしてる・・・ ヤバいね、なんて事を考えながら待っていると・・・ 雛陽さんは生徒に告げた。
「本校の来年度の進学希望者が規定数に満たなかった場合、音乃木坂学院は廃校と致します。」
ざわざわ・・・ ざわざわ・・・
穂乃果はやはりショックのようで少しだけ動揺している。
理事長は戸惑っている生徒に向けて言葉を続けた。
「本校は廃校を阻止するために来年度から共学化を行います、その為に今年度からこの学院に通ってもらう三名のテスト生を招き入れております。」
そして、その瞬間がやってきた。
「それではテスト生代表の有里湊君、壇上に御上がりください。」
ふぅ・・・ 出番かぁ、行きますかね。
僕はゆっくりと壇上を上がって行き・・・ マイクを手に取った。
「ご紹介に預かりました、有里湊といいます、慣れない所もございますが僕と今後やってくる二人もよろしくお願いいたします。」
こんな感じでいいよね？話しながら周りを見た感じ生徒は不快感を出してるやつはほとんどいないけど、教師側が不満を隠しきれていないみたいだし。
まぁいいか、穂乃果以外の人からの評価なんてどうでもいいし。
とまぁそんなこともあり、始業式と言う名の集会は終わり、それで僕は今職員室の前にいる。
「はぁ・・・ 緊張するなぁ・・・」
なんで僕がこんなに緊張しているかって？
それは先程のスピーチで教師からのあからさまな嫌悪の視線を感じたからだよ・・・（ ；；・ω・、）
考えていても仕方ないと割り切り、僕が一年間過ごすクラスの担任が来るまで待った。

待つこと5分後・・・

「まだかなぁ・・・」

5分待ったが未だに来ないと思っていると、職員室のドアが開き、先生がやってきた。

「いやぁゴメンなー待たせて、私が今年一年間君のいるクラスの担任を勤める山田博子(やまだひろこ)だ、よろしくな。」

「よろしくお願いします、先生。」

先生と握手を交わし、僕と先生は教室に向かったのはいいけど・・・

「有里〜お前はここで呼び出されるまで待機していてくれ。」

「ええ・・・ まぁ解りました。」

まぁどうせホームルームで僕を呼ぶんだろうけどさ。

ハッハッハッと笑いながら山田先生は教室に入っていき、

ホームルームが始まった。

「よーしまず自己紹介だ、今年一年間君達の担任を受け持つ事になった山田だ、よろしく、それとお前らに朗報だ!今日集会で話されたテスト生はこのクラスだ!」

キャーキャードンナコナノカナ!ヤッタァ

「さぁ、入ってきたまえ。」

そして呼び出しが来たので、ゆっくりと教室のドアを開け、山田先生の隣に立った。てか、穂乃果のやつ寝てるし・・・

キャーキャースゴイイケメンジャン!!

「彼が共学化テスト生である有里湊だ、一年間、仲良くしたまえ、有里、自己紹介頼む」

はぁ・・・ めんどくさいんだけとなぁ

「えーご紹介に預かりました、有里湊です、趣味は料理作りです、よろしくね、ちなみに僕はそこで寝てる穂乃果の幼馴染です」

そう言ってお辞儀をした。

エーホノカチャン幼馴染ナノォ!!

「あー気持ちは解るが静かになー、あと園田、穂乃果を叩き起こせ」

山田先生は生徒に穂乃果を起こすように頼んだみたいだけと・・・

（叩き起こすのは乱暴じゃないかな？）
「解りました、穂乃果、起きなさい！」バッシィィィン!!
「痛いよ海末ちゃん！」
「穂乃果が寝ているからいけないんです！」
・・・　あれは穂乃果に賛成だね、思いっきり叩かれたら痛いよね、凄い音鳴ってたし。
　そんな事を考えていると、穂乃果は僕に気付いたようで、話しかけてきた。
「あっ！みーくんおはよー！」
「うん、おはよう穂乃果」
「そういえばみーくんさっきの集会はビックリしたよね！ってあれ？皆どうしたの？」
　そういえば周りにいる人が固まっている、南さんはそこまで驚いていないみたいだけど・・・
　その直後に皆はこう言った。
「えええぇぇ!?本当に幼馴染だったの!?」
　皆は叫んですぐに僕に向かって滝のように押し寄せて来た。
　これは当分掛かるな、と僕は苦笑いするのだった・・・

幼馴染の親友は鬼のように怖かった!?

「ふぅ・・・ やっと終わったよ・・・」ゲッソリ
「お疲れみーくん!」
　穂乃果からの労いの言葉をもらい、ＨＲ　を終えた僕だけど、何故こんなに疲れているのかと言うとね・・・

「ねぇねぇ有里君!」
「はい、何でしょうか?」
「有里君ってさー高坂さんとどんな関係なの?」
「穂乃果とはただの幼馴染だよ、今は訳あって居候させてもらってるけどね」
　ゾクッ・・・
　その瞬間、あらゆる生き物が停止しかねない寒気で穂乃果やそのクラスメイトは逃げていった。
　ッ!?背後から殺気を感じたから後ろを見たら大和撫子な女の子が凄い形相でこっちを見てるんだけど!?僕何かまずいこと言ったのかな・・・ ?しかも何かこっちに歩いて来てないか!?
　僕がオドオドしていると怒っている女の子が話しかけてきた。
「あなた、穂乃果に破廉恥な事していませんよね?」
　女の子は僕にそう聞いてきた。とりあえず、この女の子が聞いているのは穂乃果にやらしい事をしていないかを聞いている訳か。
「少なくとも貴方が思うような破廉恥な事は一切してませんよ、だから安心してください」
　こう答えれば大丈夫なはず・・・
「いささか不安ではありますが・・・ 良いでしょう、今はあなたの言う事を信じましょう、湊君」
　女子生徒は納得してくれたようだ・・・
「それはどうも、ところで僕はまだ貴方の名前を知らないから教えて欲しいんだけど?」
「あっ、すいません。私は園田海末(そのだうみ)と言います。」

園田さんか…
「いい名前だね、これからよろしくね園田さん」
「はい、よろしくお願いします。」
僕は園田さんと握手した。園田に耳元で「穂乃果に何かしたら…解ってますよね？」と低い声で言われて死ぬほど怖かったのは秘密である。
あ、そういえば穂乃果のこと忘れてた… と、噂をすればなんとやら、穂乃果が戻ってきた。
「海末ちゃん！みーくんと何を話してたの？なんかすごい怖い顔してたけど…」
穂乃果よ、それは今聞く必要はないと思うんだけど、園田に至っては若干こめかみ動いてるし…
「ただ単に挨拶をしただけですが？」
ええ!?あれだけ殺気を回りに撒き散らしておいて挨拶なわけないよね!?
「海末ちゃんさすがにその言い訳には無理があると思うよ!?」
「それは僕も同感だね、園田さんは気付いてないと思うけど穂乃果と一部のクラスメイトが走って教室から逃げてたよ？」
「なっ!?穂乃果は私をなんだと思っているのですか!?」
「悪代官！」
「誰が悪代官ですか誰が!!」
「じゃあ鬼！」
「私は鬼でも悪代官でもありません!!」
穂乃果と園田は言い合いになってるけど、どうしようかな… うん、とりあえず落ち着かせよう、話も進まないし。
「とりあえず… 二人とも落ち着こ「「でも海末ちゃん（穂乃果）が!!」」…」
ブチィ…
今はそれどころじゃないだけどなぁ… 仕方ない、少し怒るか。
「なにかいった？」
「「はい…」」

湊を怒らせてはいけないと穂乃果と海末は心に誓うのだった…
そしてその日の授業を終え、僕と穂乃果は帰宅した。

穂乃果と他愛ない会話をして『穂むら』の扉を開けると春穂さんが立って待っていた。
「ただいまー」
「お帰りなさい、穂乃果、湊君。そういえば二人とも、この前のニュースって、見た？」
「ニュース？」
「……」
うーん… と穂乃果は考え込んでいるが、僕の予想が正しければ、恐らく最近ニュースで話題になっている『無気力症』についてだろう。僕がこの世界線にくる前にいた時もこの時期から無気力症に関するニュースが出てきていたし、それにそろそろ『満月』が近付いて来ている。満月になれば強力なシャドウが涌き出てくる。そうなったら自分を守るので精一杯になってしまう。そうなる前に一刻も早く強くならなくては… 穂乃果を守ることができなくなってしまう。
「？どーしたのみーくん？」
「あぁ、これから春穂さんが話す内容を予想してたんだ。」
穂乃果に心配されたのでごまかしたら春穂さんが自信に満ちた顔でこっちを見ている。
「それじゃあ当てて頂戴？」
「なんでそんな自信げなんですか… 大方無気力症になる人が増えているから気を付けてってことでしょ？」
「凄いなんでわかったの!?」
「いや、テレビ見てたら分かりますよ…」
春穂さんと穂乃果は驚いているみたいだけど、テレビやネットで随分と話題になっている、それ故早急にこの問題を解決しなければいけない。二度も大事な友達を亡くすのはもう見たくない。

この時にもう少し警戒していればあんな事になることは無かったと後悔した…

湊を見つめる、怪しげな物体に湊は気付かなかった…

そしてそれが穂乃果を影時間に巻き込む要因なってしまうとは知らずに…

生き残る為に少年少女は銃を取る

春の陽気を感じながら幼馴染の穂乃果と他愛ない会話をし、家に帰ったら春穂さんに巷で話題になっているらしい『無気力症』に気を付けてと心配されたが、正直言えばアレを防ぐことは普通の人なら無理だろうね。

…　もし穂乃果が普通の人なら僕が全力で守り抜かないとね、でも今重要なのはそれじゃない、家に帰ってからとてつもなく嫌な感じがする。それも特大にヤバい感じだ。それに後1日2日で『満月』だから敵も強くなってるのに…　こんな時に仲間がいれば助かるんだけどなぁ。とにかく今は無い物ねだりしてる余裕も無いし、影時間に備えておくことぐらいしか対策は取れないのが現状だ。

そんな考え事をしている湊はふと思い出した。

それにしても…　雛陽さんが言っていた他のテスト生の名前がかつての仲間と一緒だなんて…　これは偶然なのか？

…　一緒だったら嬉しいな。

さてと。晩御飯を頂いたら風呂に入って戦いの準備をしないとね。

穂乃果？ｓｉｄｅ

「なーんか今日の海末ちゃんなんか変だったなぁ、でもいつも通りな気もするし…　ま、いっか！」

嘘、ホントは今日の海末ちゃんが変なのは気づいてる、けどそれには触れてはいけない感じがしたから〝触れないで〟置こう…　それに、『私』が居ることを知ったら『穂乃果』のことを海末ちゃんやことりちゃんが気持ち悪がるもしれないし…　まぁ本来『私』はどんな人にも必ず持っている一面なんだ、私の場合はちょっと特殊だけど。『穂乃果』も眠たいみたいだし今日はもう寝ちゃおうっと！

――――さぁ、君達の物語が始まるよ――――

ふと、眠りに着く直前に幼馴染と似た声を『穂乃果(わたしたち)』は耳にした。

湊ｓｉｄｅ

――――――――――――――――

「ふぅ、予習やら戦いの準備してたら遅くなっちゃったな、さてと・・・今日もリハビリがてらやるかね。」

色々とやることがあったせいか、時計の針は２３時５８　分を指していて、湊は気を引きしめた。

だが、湊は今日もリハビリついでにシャドウを倒そうと言う何とも軽い理由で戦いに向かった事が穂乃果を影時間に巻き込むとは思っていなかった。

そして、今宵もまた、影時間が始まった。

「さて、今日は周辺パトロールにしておこうかな、戦力が足りない状況でなおかつまだ僕が一時的とは言え弱体化している時にあの塔(タルタロス)に挑むのは無謀だ。」

それに穂乃果の事が心配だ。今日も寝ているとは思うけど・・・　起きていたらマズイ事になる。穂乃果の事だ、きっと辺りを歩くか園田や南の所に探しに行くだろう。

「・・・　一応確認しておこう。」

スタスタ・・・　コンコン

「穂乃果ー、失礼するよッ!?・・・　マジですか・・・」

僕が穂乃果の部屋を開けた先には誰もいなかった。

考えたくも無いが穂乃果は家の外に出た可能性が出てきた。

「急いで捜さなきゃ!・・・　あいつの命が危ない。」

僕は急いで一階のリビングに向かったが、いたのは象徴化した人だけで穂乃果の姿はなかった。となると残るは・・・

「・・・　外か。」

どうして今日は起きて欲しくない事ばかり起こるんだよ・・・　！

「待っててね穂乃果、今助けに行く!!」

僕は一重の不安を感じながら家を後にした。
湊ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　…

穂乃果ｓｉｄｅ

――――起き――――穂乃果！――――
（誰かが…　穂乃果を詠んでる…　？）
不意に聞いた声と回りの明るさに私は目が覚めたんだけど…　あれ？ここどこだろう？寝るまで部屋で寝てたはずなのに。
それに月が黄緑色に変色していてなんか不気味なんだよねー…
「それよりも…」
問題なのは何でこんなに月が光ってるの!?
しかも不気味な光り方してるし！
私がこの意味不明な状況に驚いていると…
さ
「ヒタ…　ヒタ…」
「ひぃ!?誰かいるの!?」
どこからか聞こえてきたその音が近づき、そして…
「――――ッ!!」
『化け物』が姿を表した。
「に、逃げなきゃ！」
なんとなくだけど、早く逃げないと危ない!!
私はあの謎の化け物から逃げようと身体に力を入れたけど…　足がすくんで動けなくなってしまった。
「うそ!?身体が動かないの!?」
ああ…　穂乃果はこのまま死んじゃうのかな？
そんなの、そんなの、絶対…
「嫌だ!!まだ私はみーくんにこの気持ちを伝えてない!!だから、誰

か・・・ 私を助けて!!」
そして、その願いに応えるように。
「穂乃果ぁアァァ!!」
彼(私の大事な友達) はやって来た。
穂乃果side out

湊side
「はあっ、はあっ!!」
穂乃果を走りながら探して十分経ったが未だに見つからない、早く見つけないといけないのに!!
僕が焦っているのを嗤うように目の前に「臆病のマーヤ」が二体表れた。
「今はお前と遊んでいる暇はない!焼き払えオルフェウス!!」
僕はややイラつきながらオルフェウスを召還しシャドウを文字通り焼き払い、再び穂乃果を探そうとした時。
「―誰か私を助けて!!」
小さいが穂乃果の声が聞こえた!!
「今行くよ・・・ !!」
絶対に穂乃果を死なすものか、僕にとっての太陽をここで無くしてたまるか。足に力を入れろ、血液を廻せ、そして駆け抜けろ!
「穂乃果アァァ!!」
いた!でも近くにシャドウがいるのか、それも巨大な。出来れば穂乃果には見せたくなかったけど・・・ やるしかないね。
来てくれ、もう一人の僕ッ!
「ペルソナッ!!」パリーンッ!!
「みー、くん?」
穂乃果は僕のやった事に驚いている、そりゃそうだ。端から見れば拳銃自殺してるようなものだから。
「・・・ 行くぞ、オルフェウス。」

シャドウ『臆病のマーヤ』はこちらの召還を敵対行為と受け取った様だ。
でも、そんなの今の僕にはどうでもいいこと、有るのは・・・
僕の大事な人を傷付けようとしたお前が赦せない!!（僕を照らし包み込む太陽）
「行け！オルフェウス！」
『アギッ!!』
オルフェウスの放った爆炎はシャドウを焼くが、シャドウは何事も無かったようにケロっとしている。それが示すのは・・・
「炎が効かない・・・」
おかしい、以前同じシャドウにアギを放ったら普通に効いた筈だ。・・・ どうやら同じシャドウだからいって弱点が一緒とは限らない様だ。
「・・・ なら、力づくで倒すまでだよ。」
正直コイツを手懐けるのは相当難しい。下手をすれば死ぬ。けど、やらなければ穂乃果は死んでしまうだろう。
――なら、オレを使いこなせ。そうすれば穂乃果を助けられる。大丈夫だ、お前は世界を救った英雄だ。なら、今更オレを使いこなすのなんて簡単だろう？
あぁ・・・ なんだ、最初から答えなんて決まっているじゃないか。
「来い・・・ タナトス!!」パリーンッ!!
ヴゥォォアアア!!
死を背負いし死神が雄叫びを上げ君臨する。
「ハァ、ハァ・・・ !!」
絶え間なく来る頭痛で頭がどうにかなってしまいそうだけど、幸い一番最初にコイツを呼んだ時よりかは安定している。これならヤツを倒せる!!
「切り伏せろ、タナトス！」
「ヴゥォォアアア!!」
『五月雨斬り』
タナトスが放った斬撃はシャドウを容赦無く切り刻んだ。が、
「・・・ さすがは大型シャドウ。大技を喰らってもまだ動けるなんて

ね。」
　まぁいいや、次でトドメを差そう。
「トドメを刺せ、タナトス！」
『亡者の嘆き』
　流石にこれは相当応えただろ？
「グゥォォォ・・・」
　大型シャドウ化した『臆病のマーヤ』は消滅した。
「はぁ、はぁ・・・ やったか・・・」
　だが、そこで油断したがために湊はすぐに近づいているシャドウに気づけなかった・・・
　キシャァァァァ!!
　僕は大型化したシャドウを倒した事に安堵して反応が遅れてしまい、背後にいた『臆病のマーヤ』に
「ッ！しまっ・・・」
　ドッゴッ
　ズサァァァ
「みーくん!!」
「ぐっ・・・」
　穂乃果の叫ぶ声が聞こえる・・・ やばい、そう言えばまだシャドウがいたんだった・・・ 早く倒さないといけないのに・・・
　なんでこういう時に限って身体が動かないんだ!!
「これは・・・ みーくんが使ってたやつだ・・・ これなら穂乃果にもアレを出せるのかな？」
　穂乃果はおもむろにそこに落ちている僕がさっきまで使っていたそれを手に取る。
　待て、それを使えばお前は、もう普通の生活を遅れなくなるぞ!!
「ま、待て穂乃果！」
「何が待てなのみーくん！待ってたらみーくんが死んじゃうの待つなんて私には出来ない！」
　穂乃果は僕に怒りながら召還器をこめかみに当てる、そして穂乃果はその『言葉』を告げる。

「いくよ・・・ ペルソナ!!」
パリーンッ!!
「うっ、ぐっ・・・ !!」
なんて爆風だ!!
気を抜いたら僕の方が飛ばされる・・・ !!
「・・・ 行くよ、タレイア。」
穂乃果のペルソナ、タレイアは豪華絢爛なドレスを見にまとい右手に仮面を、左手に杖を持っている。
・・・ あの感じだとあれのアルカナは『太陽』か『愚者』と言ったところだろうか?どちらにせよ、今はどうにかして立ち直らなければいけない。
確かポケットにいざと言うときの回復薬を入れておいたんだけど・・・ あったあった。これを飲んでっと。
「ふぅ・・・ これなら多少は動けるかな、それじゃ援護しよう。」
「行って!タレイア!!」
『アギッ!!』
タレイアの放った炎はシャドウを燃やすが決定打には成らなかった。ただ、一人で戦っているならの話だが。
「――もらったよ。」
ザシュッ!!
グゥアアァ・・・
穂乃果がシャドウの動きを止めている隙に近づき隠し持っていた小剣を力一杯振り抜き、シャドウは消失した。
「これで・・・ 終わったか・・・」
「あれ?もう倒しちゃったの?ってみーくん!?怪我は大丈夫なの!?」
「傷薬飲んだから大丈夫だよ、それはそうと穂乃果、身体の方は大丈夫か?」
「大丈夫だよ!でもちょっと疲れちゃった・・・」コク・・・
「そうか・・・ まぁ疲れても仕方ないけどね。」
全く無茶にも程がある。
シャドウに襲われた挙げ句ペルソナを呼び出したんだからあいつ

の身体はとんでもない疲労が溜まっているのだろう…　仕方ないか。
「穂乃果…　失礼するよ、ってもう寝ちゃったか。」
　僕は疲れて寝てしまった穂乃果をおんぶしながら家に帰るのだった…

幼馴染と編入生　と作戦会議？

昨日の戦いから一夜明け、僕は穂乃果と穂乃果の親友である園田さんと南さんでどうやったら廃校を阻止できるかを話しながら登校していた。

「うぅん、どうすれば廃校を阻止できるのかなぁ？」

「そうですね・・・　この学校の良いところと言えば精々古くからあるということぐらいですし・・・」

「むむむ・・・　あっ！そうだ！これなら出来るんじゃない？」

どうやら穂乃果は何か思い付いたようだ。

「何か思い付いたのですか？穂乃果」

「それはね・・・　最近話題になってるスクールアイドルだよ！」

スクール、アイドル？一体何だろうか？

学生がアイドルみたいな事をするのだろうか？

「スクールアイドルって・・・　人気が出る確証は無いんですよ!?」

園田さんは穂乃果の意見に反対している。

正直言えば僕も園田さんの意見に賛成だ。理由として、

今話題だからと言う理由でやったとしてもそう簡単に物事は進まないし、まず僕がスクールアイドルがなんなのかを知らない。そんな言い訳染みた事を考えていると穂乃果が立ち止まり、

「そんなのやってみないと分からないじゃん！

このままなにもしないで廃校を待つなんて穂乃果は嫌だよ！」

と言った。

穂乃果の言い分も十分理解できる。なにもしなければ何も変わらない、全くもってその通りだ。だけどここはあえて言おう。

「それはそうかもしれないけどね穂乃果？僕はもう少し他の方法がないか探してみた方がいいと思うよ？」

「それは・・・　そうだけど・・・」

ありゃ、穂乃果が黙ってしまった。ここは気を逸らさせた方が良さそうだな。

「それよりも皆、学校に着いたよ？」

「あ、ホントだ！」
「いつの間にこんなにも話していたのですね・・・」
「それよりも・・・ 続きは教室で話そ～？」
南さんは僕の意図に気付いたようで話を逸らしてくれた。
「・・・ そうだね、今日もいろいろと忙しいからね。」
僕たちは微妙な空気のまま教室に向かい、授業の用意をするのだった。
ホームルーム・・・
授業の用意を終わらせ、先生が来るのを待っていると話し声が聴こえてきた。
「ねぇ聞いた？」
「ん？なにー」
「今日来る転入生ってうちのクラスらしいよ～」
「え？マジ!?イケメンだったらいいなぁ～」
ん？今日来る・・・ 転入生でうちのクラス・・・ まさかだけど・・・
『テレッテッテー☆』
あぁ・・・ 順平かぁ・・・ とりあえず前（以前の世界線みたい）みたいにならなければ良いけどなぁ。
そんな事を考えていると先生がやって来た様だ。
「おーい席に着け～点呼始めるぞー」
特に何も言うことがない点呼を終えて、
「さて、ここでお前たちに朗報だ。このクラスに二人目の転入生が編入することになった。」
まぁ流石に今回は皆知ってるからそこまでのあれも無いか・・・
「では紹介する、おーい？入って来いー。」
「はいはーい、今入りまーすよっと。」
気だるげな返事をしながら扉を開ける気だるげな男（順平）。
「彼がこの度編入することになった伊織順平だ。伊織、自己紹介しな。」
順平は若干めんどくさそうな表示をしているが、まぁこれだけ女子が多いと色々と思う所は有るのだろう。

「はいはーい、やりますよっと、ご紹介に預かった伊織順平でーす、以前は月光館学園って所に居たんだけど、今回テスト生として編入することになったんでよろしく～」
パチパチパチパチ…
緊張しているのか、割りと前の席にいる僕に気付いていないみたいだが、山田先生は気付かずに話を進めてる…
「さてと、伊織の席は…「僕の後ろなら空いてますよ。」そうか。それじゃあ、伊織の席はあそこだ。」
「わかりましたよ先生～」
順平はまだこっちに気付いていないみたいだな… 僕が前にいる事を。
「さーて自己紹介も終わったし授業の用意を… え？」
あ、やっと気付いた。
「やぁ、久しぶりだね、順平。」
「湊じゃねえか！」
「そうだね、とりあえず自己紹介お疲れ様、あと次の授業は現代文だよ。」
「あいよー、ありがとさん！ところでよー湊？」
僕はいつになく順平が真剣な顔をしていて少し驚いてしまい返事が遅れた。
「… どうしたの？」
「正直よ、今のこの学校の状態ってそんなにまずいのか？」
… 順平の事だから、『湊はこの学校で可愛いと思う奴はいるの～？』とか聞いてくると思ったんだけど、流石に今回は真面目だった。
僕はそこまでこの学校の状況を知ってる訳ではないけど、これだけははっきり言える。
「正直、このまま何もしなければ廃校は確実だね。」
「おいおい、マジ？」
「本気と書いてマジと読むぐらいには」
「そりゃ大変じゃん！ようし決めた。湊、俺たちで廃校阻止してやろうぜ！」

「そうだね、僕の幼馴染の為にも。」
順平から共に廃校阻止をしようという信頼を感じる…
「――ッ!?」
『我、かつての仲間と新たなる絆見いだしたり…』
この感覚は… 以前に体験したコミュの解放…
アルカナは… 法王？（前の時は魔術師だったような？それに聴こえてきた言葉が少し違うような？）
まぁ、この事は今は後回しだね、それよりも今は早く廃校阻止の手段を考えないと。
「おーい？なにぼーっとしちゃってんの？そろそろ授業始まるぞ～」
考え事をしていたら順平が少し心配そうに話し掛けてきた。時計に目をやるともうすぐで一時間目の授業の時間になりそうになっていた。
「ごめん… ちょっと考え事をね？」
「お、早速廃校阻止の手段を考えてるカンジ？」
「これから考えるところだよ。」
「りょーかい、それじゃ、続きは昼飯の時にしようぜ。」
「うん、わかった」
昼飯を順平と食べる約束をして、若干眠たくなりながら午前中の授業をこなした…
キーンコーンカーンコーン!!
午前の授業が終わり、クラスの皆は拘束からの解放によりテンションが上がっていたのだが…
「はぁ… やっと終わったぁ…」
「お疲れ、順平。」
順平は編入早々グロッキー状況になっていた… なんでさ。
「でも、これで午前中の授業も終わったし、飯でも食べるか！」
「そうだね。」
あれ？何か忘れてるような… まぁいいや、どうでもいい。
それが地獄になるなんてこの時の僕は想像もしていなかった。
「… みーくん遅いなぁ、どこ行ったんだろ？」

「恐らく今日から編入した伊織君と昼食に行ったのではないでしょうか？」
「ことりもそう思うなぁ…」
「せっかくみーくんに見せようと思ったのに… こんど死ぬほど穂まんを食べさせようかな？」
「何を見せるのかは分かりませんが有里君に穂まんを死ぬほど食べさせるのは良くないですよ穂乃果。」
――――ッ!?
なんだ今のは…
「？どうしたんだ湊？」
「いや、ちょっと悪寒がしてさ…」
「マジで？何かしたのか？」
「多分ないと思う…」
そう言えば今日なにか約束してたような… あ、あるじゃん。
「おい？まさか…」
「今日穂乃果達とご飯食べる約束してるんだった…」
「あちゃー、それはやっちゃったな湊… とりあえずその穂乃果ってやつの所に行くぞ。」
「そうだね。… 絶対怒ってるよ穂乃果のやつ」
拭いきれない不安を抱きながら僕たちは穂乃果達が居るところへ向かった。